

自校史と建学の精神

一 郷 正 道

光華女子学園略史

連休の狭間で、いろいろご予約があつたかと思いますが、たくさんの方にお集まり頂いて恐縮しております。皆さん方が入学して来られて、かれこれひと月が経とうとしておりますが、皆さん、大学の生活に慣れてこられましたでしょうか。たぶん九〇分の授業が長くて、かなりしんどい思いをしていらつしやることかと思ひます。これもだんだん慣れていかれることであらうと思ひます。

さて、今日は学長講話ということで、「自校史と建学の精神」というタイトルでし

ばらくお話したいと思います。

まず、自校史についてであります。私たちが通っている大学がどんな歴史を持っているか。どんな背景のもとにこの大学ができて、どうして私たちがこの大学において学んでいるのかということをも自分自身理解することは、大切なことであろうと思います。幸い、本学の理事長さんが、『光華女子学園七〇年の歩み―自校史―』という冊子を作って下さいましたので、その冊子から大事なものだけと言いますか、エッセンスを抜き出したのが、今日の資料の一頁目の内容です。それによって皆さん方に本学園の歴史を理解して頂きたいと思います。理事長先生もおっしゃっておりますが、この光華女子学園は、ちょうど今年が七〇周年という記念すべき年になっておりますけれども、その七〇周年を四つの時期に分けて理解したらいいであろうということですね。すなわち、創立期、成長期、成熟期、変革期の四つの区分です。皆さんが入学してこられました今年には、変革期に入っている時です。

それでは、本学園はどのような経緯で出来てきたのでしょうか。そのお話をしてみたいと思います。資料の「創立期」の項目をご覧ください。まず、本学の創設者は誰で

自校史と建学の精神

あるかと申しますと、東本願寺の前のご門首の奥様、その方のことを「お裏方」とお呼びするんですが、その大谷智子裏方が、仏教精神、就中、親鸞聖人の教えに基づく女子教育の場を京都に設けたいという、願いのもとに出来たのが光華女子学園なんです。実はそれより前、お裏方が中国に行かれてたとき、北寧鉄路局総裁という地位にあられた陳覚生チンカクセイさんの奥さん、陳鮑蕙チンポウケイさんという女性にお会いになったのです。陳覚生さんは、智子裏方にお目にかかるのを非常に楽しみにしておられたんですが、智子裏方が中国に行かれる少し前に病気のために亡くなってしまわれたんです。そこで奥様が智子裏方にお会いになって、何をお願いされたかというところ、ご主人の遺産を差し上げるから、この遺産で仏教精神に基づいた女子教育の場を作ってくださいと願われたのです。智子裏方はそれを聞いて協力を約束し、北京に女子中学校を創設されました。鮑蕙さんのご主人の名前をとって「覚生女子中学校」と名付けられました。これが実は皆さん方が学んでいる光華女子学園の出発点になるわけです。人との出会いは非常に大事な事だなと思います。もしも、大谷智子裏方が陳覚生さん、鮑蕙女士にお会いになっていなかったならば、今のこの光華女子学園というのはなかったかもしれない

ないです。そういうことから言っても、今、皆さん方がここで勉強できるのは、こういうお二方の出会いがあったから可能になっているんだということです。もう一つ言いますと、陳鮑蕙という方が女子教育を行うにあたって、仏教の教えによって女子教育をして欲しいと願われています。いかに仏教の教えが大事なものであったかということが分かるわけです。それが昭和十三年、今から七二年前のことであります。私は現在においても仏教の精神、仏教の教えというものをこの世の中に、こういう時代であればあるほど、ますますしつかりと伝えてゆかなくてはいけないと思いますし、その仏教精神のもとに学んでいただく学生さんがたくさん育って欲しいと思います。ここでまず皆さん方には、この光華女子大学の前身がそういう由来であったということ、そういう人と人に出会いによってこのような教育の場が開かれたこと、しかもそれは仏教の教えによる学園であるということ、ことを頭に置いて頂きたいと思います。

次に校名の由来です。「光華」という名はどこから来たのかと言いますと、『仏説観無量寿経』というお経がありまして、その中に次のような言葉が出てきます。「其光如華 又似星月 懸處虛空」という文言です。「その光がちょうど華のようであり、

自校史と建学の精神

又、星とか月が空に懸かっている。それに似ている。」という意味です。そこで、「その光」とは何ぞやということ。その光が華のようだと仰うんですけれども、華のように輝く光は何なのかです。この『仏説観無量寿経』には一つの物語が書かれています。「王舎城の悲劇」といわれますが、マガダ国に韋提希イテイキというお母さんがいたんですが、そのお母さんは自分の息子阿闍世アジャセに牢屋に閉じこめられてしまうんです。その息子は国王である父親も殺してしまふ。さらにこの母親韋提希夫人をも牢屋に閉じこめてしまうんです。それで困ったお母さんが、お釈迦さまにこの悩みを打ち明けるわけです。そうしたらお釈迦さまが、それじゃ浄土の教えを聞きなさい、というアドバイスをなさった。そこでお母さんは、浄土の教えとは何だろうかと、自分自身で問うていくんですね。その時にお釈迦さまが「浄土について思い巡らせなさい」ということをおっしゃる。浄土がどんな世界なのか思い巡らせる、観想するということです。十六の種類の思い巡らせ方があるんですが、ここに登場しているのはその中の「水想観」と言つて、まず「水」について瞑想しなさい、頭の中でいろいろ考えなさいと。その次は「氷」です。水が凍っている、その氷のことをいろいろ頭の中で描きなさい

い。最後は瑠璃、メノウという宝石です。瑠璃のことを想い巡らせてごらんさいと。その瑠璃が敷き詰められた大地には七つの宝があつて、その七つの宝の一つ一つの光が五百色、五百種類の色を発している。その五百種類の光が華のように美しいものなんだという記述になっているわけです。その宝石が発する光が浄土の大地において華のように美しいんですよということ、**「光華」**という言葉が大谷智子裏方によって採用されたと考えられます。

ところで皆さん、**「光」**とはどういうものでしょうか。皆さん方**「光」**という言葉聞いた時どんなイメージがありますか。太陽の光、月の光：なんでもいいのですが。まず**「光」**とは暗闇を照らしてくれるもの。暗いところを射して明るくしてくれる。明るくしてくれるということは、同時に私たちに一つの指示と言いますか、歩んでいく方向をはつきりと分かせてくれますね。そういう働きを持っています。そして光は差別なく照らしてくれますね。アメリカ大陸だけは照して日本列島は照さないとかそういうものと違う。無差別に光というものは輝いてくれるものです。あるいは現代の生物学的な言葉で言いますと、光合成、まさに我々の命を支えてくれるものが光

自校史と建学の精神

の働きです。仏教ではその光が智慧に例えられるんです。智慧の働きによって自分の本当の姿を照らしてもらいましょうと。その智慧の光に照らされて本当の自分とは何か、真の自分に目覚めてくださいという、願いが込められて、本学園の学校名「光華」という言葉が採用されたんだと思うんです。その校名のもとに建学の精神、あるいは校訓がありますが、これは後でお話するといたしまして、もう少し本学の簡単な由来を紹介していきます。

北京では昭和十三年にまず中学がつけられました。そして智子裏方は京都に帰ってこられて、早速関係者に京都にもつくりたい旨の願いを伝えられました。そこで本学の今の理事長さんのおじいさんに当たられる阿部恵水さんという方が一生懸命に動かれ、昭和十五年に「光華高等女学校」というのができたんです。これが実は現在の光華中学、高校の前身なのです。そして、十九年になりますと、「光華女子専門学校」が開設されます。この光華女子専門学校が、実は皆さん方の在籍される大学の前身になるんです。今の我々の短期大学、四年生の大学両方共、この光華女子専門学校が前身のだということを頭に置いてください。簡略に申しますと、今本学は幼稚園

から大学院までの総合学園だと言われておりますけれども、どういう順番で出来上がってきたのかということだけお話しておきましょう。まず、中学ができて、それから高校ができる、そして短大ができる、短大から大学ができる、その後に幼稚園、幼稚園の後に小学校、そして小学校の後に大学院ができて、現在の光華女子学園という総合学園になったのです。

資料の「エンロールメントマネジメントと大学改革」をご覧ください。エンロールメントという言葉そのものは英語の単語でありまして、在籍者数とか登録者数という、あるいは入学とかそういう意味の英語の単語であります。それを今私たちはもう少し幅広く使って、在学中は当然ですが、入学以前から、更には卒業後に至るまで、皆さん方ひとりひとりに親身になっていろいろなお世話をさせていただきますよ、という教育システム。それを「京都光華のエンロールメント」という言葉で表しているのです。そのような教育のシステム、そういう方針、具体的な教育方法は非常に高く評価されて、文部科学省の施策のG.P、即ち、「Good Practice（すぐれた 取り組み）」に申請しましたら、この三年の間に大学・短大あわせて四件も連続してその

自校史と建学の精神

GPに採択されるという栄誉を担いました。今からお話しますけれども、本学の建学の精神にのっとり、学生さんひとりひとりを大切にされた教育をすることが、文部科学省からのお墨付きを得たわけでありました。それに基づいて京都光華のエンロールメントという教育システムが出来上がっているということを頭に置いていただきたいと思います。

建学の精神

それではこれから「建学の精神」についてお話したいと思います。

まず大学には「学則」というものがあります。その第一条に、大学にしろ、短期大学部にしろ、いずれも仏教精神によって女子教育をするということが謳われております。とりわけ本学の場合は親鸞聖人による、真実の教えによって人間形成をするということが本学の学則に謳われていることなんです。それを智子様はもっと具体的な言葉で残してくださいました。それが「校訓」というものです。校訓というのは学校に

おける教育上の理念とが目標です。それを智子裏方は「真実心」という言葉でおっしゃったんです。「真実心」を身につけてくださいよというのが智子様の願いであったわけです。ですから我々も、ここに入学してくださった皆さん方には、二年ないし四年のうちに「真実心」を身につけていただきたいということが願ひなんです。

ところでこの「真実心」という言葉は響きはいいんですが、ちょっと抽象的によく分かりませんよね。智子様が選ばれた言葉でありますから、親鸞聖人の言葉だと思いますが、文献の上で「真実心」がどういう心なのかということを探ってみたいと思います。

まず一つは親鸞聖人の主著であります『教行信証』という書物の中に、親鸞聖人は『涅槃経』の文言

真実というはすなわちこれ如来（仏）なり、如来（仏）はすなわちこれ真実なり

を引用されています。その文言から「真実」、「仏」という言葉に「心」という言葉を

自校史と建学の精神

プラスすれば、「眞實心」＝「仏心」ということになりませぬ。では「仏心」とは何なのかというと、『仏説観無量寿經』というお経を見ますと、「仏心というは大慈悲なり、無縁の慈悲をもつてもろもろの衆生を摂す」という言葉が出てくるのです。ちょっと分かりにくいのは「無縁の慈悲」という言葉がありますが、これは無縁でありますから、特定のものだけを対象とするものではない慈悲のことです。それを無縁の慈悲というわけです。「仏心」＝「慈悲」ということになりますから、まとめますと、「眞實心」＝「慈悲の心」とそういうことになるわけです。ですから、校訓であります「眞實心」は言葉を換えれば「慈悲心」、慈悲の心だと文献の上で証明できるのです。

もう一つの資料を紹介しましょう。『浄土文類聚鈔』という親鸞聖人が八十三歳ぐらいになってお書きになった書物でありますけれども、そこにはこんな文言があります。「この心はこれ、如来の清浄広大の至心なり、これを眞實心と名づく。至心はすなはちこれ大悲心なるがゆえに、疑心あることなし。」「至心」という言葉はどういう意味かというと、仏の眞心。これが「至心」。しかもその「至心」が「眞實心」だとおっしゃるわけです。さらに「至心はすなはちこれ大悲心」であるとおっしゃってま

す。それを図式化すれば「至心」||「真実心」、「至心」||「大慈悲心」ですから、すなわち、「真実心」||「大慈悲心」だということになります。という具合に、親鸞聖人の著作の中から真実心というのは慈悲の心であるという、そういうふうな文献の上から証明できるわけです。慈悲の心というのは仏様の心です。所詮、私のような凡人にはなかなか身に付けることのできない大変なものだと思います。しかしお互いそれを模範とする、目標とすることはできるでしょう。だからみなさん方はこの在学中に、この慈悲の心を身につけよう、真実心を見つめましょうという目標、校訓のもとに一生懸命勉強すればいいと思います。

慈悲の心

慈悲の心といっても現代の時代にはなかなかピンとこないかもしれない。それを現代語に別の言葉で言い換えますと、「他者への配慮」とか「思いやりの心」あるいは「共に支え合う心」、難しい言葉で言うと「摂取不捨の心」、摂め取って捨てない心と

自校史と建学の精神

いうことです。あるいはまた、「利他の心」。他人のためになる、そういう心のことを慈悲の心と言うんだと理解すればいいと思います。繰り返しますが、本学の校訓の「眞実心」は慈悲の心と置き換えることができます。その慈悲の心を現代語で表すならば、「他者への配慮」「思いやりの心」「共に支え合う心」「摂取不捨の心」「利他の心」という言葉に置き換えることができると思います。お互いこの慈悲の心が身に付くようにしたいと思います。

それでは、どうしたら慈悲の心を私たちが身に付けることができるのかということの問題です。言葉では分かるけれども、どうしたら我々に慈悲の心が身に付くのか。それは、私たち一人一人が本当の自分の姿に気づくこと。自分とは何ぞや。自分の本性は何だとか、自分の本当の姿に目覚めると、自ずから慈悲の心というものが生まれ出てくると思います。それでは、眞の自分、私とは何ぞやと言った時に、答える言葉として私は二つの姿、自分について二つの姿に気づくこと、これが大事だと思えます。その一つは、縁起的存在、二つは、罪悪深重の身であるということ。その二つに

気づくことだと思っています。それが本当の自分に出会うことだと思うんです。難しい言葉が出てきましたね。「縁起」なんて言葉が出てくる。縁起的存在って何ぞや。しかも、私が罪悪深重の身であるということもどういことなのか。大変難しいですね。その話を今からします。そうでないと慈悲の心が分からないからです。

縁起的存在

まず、大事なこと、「縁起」とは一体何なのか。今、皆さんが「縁起」という言葉を聞いたら、どういう意味で使っておられますか。「縁起」が良いとか悪いとか言い方でしよう。あるいは〇〇山縁起とか、歴史とか由来とかいう意味合いを持った言葉として使いますね。ところが今ここで使っている「縁起」はそういう意味とは違えます。又、罪悪深重。皆さん方、自分が罪人だ、悪人だと思っていらいっしょいますか。誰一人として思っておられないでしょう。人がしゃべっていてもやかましくしている、そういうのを別に罪と思わないかもしれない。罪とか悪というのは法律上の

自校史と建学の精神

問題じゃないんです。この場合は、もっと精神的な問題なんです。これからその話をしていきますけれども、とにかくその二つの事に気づかないと、本当の自分が分からないですよということです。

まず「縁起」という言葉について話します。「縁起」という言葉は実はお釈迦さまのお悟りの内容なんです。仏教を開かれた方がお釈迦さま。お釈迦さまは何に目覚めたのか。何に目覚めて悟りを開いたのかと言うと、「縁起」の道理に目覚められたのです。これが大事なんです。よく皆さんは仏教は何について説くのかと問うと、仏教は無常ということを説いたり、無我ということを説くんだという答えをされるかもしれないけど、それでは十分じゃない。お釈迦さまは何を説かれたのか、何を悟られたのかと聞かれたら、お釈迦さまは「縁起」の道理に目覚めたという、そういう答えをしてください。したらみんなビックリしてしまいます。実際そうなんです。それですから、「縁起」というのは、今我々が使っている言葉遣いとは違うのであって、お釈迦さまのお悟りの内容が「縁起」ということの内容なんです。

「縁起」とは言語的には、*Pratya-samupada* とサンスクリット語で言いますけれど

も、漢字で書く通り「縁りて起こる」という意味です。漢訳が元の意味をしつかり示しているんです。具体的に示す定型句がありますからそれを紹介しますと、

これあれば、かれあり。これが生ずることによって、かれが生ずる。

これがなければ、かれなし。これが滅することによって、かれが滅する。

これが「縁起」の理論なんです。お釈迦さまはこの理論に気づかれたのです。皆さんは悟りの内容ってこんな単純なのかという印象を持たれるかもしれませんがね。確かにそうなんです。非常に単純ですよ。それが本当に私に身に付くかどうかが問題なんです。もう少し説明していきますと、「これ」とか「かれ」という代名詞は全然意味がない。「これ」をA、「かれ」をBと置き換えてみたらいいですね。AあればBあり。Aが生ずることによってBが生ずる。AがなければBはない。Aが滅することによってBが滅する、という定型句。つまりAとBとの相関関係、それが「縁起」なんです。もつと言えば、AというものはBと関係なくAが成り立つのではなくて、Bが

自校史と建学の精神

あることによつて始めてAというものも成り立つ。あるいはBもまたAがあることによつてBというものが成り立つという相関関係ですね。それが「縁起」という考え方です。BがなかったらAはないし、AがなかったらBはない、その関係です。それをもうちょつと具体的な例でお話することにしませう。

東西、西という方がなければ東はないでしょう。同じように東がなかったら西はないでしょう。その東と西の関係、これが「縁起」の関係なんです。東によつて西があり、西によつて東があるという関わり合い。あるいは又、親子の関係もそうです。生物学的には、親がいたからお互い今の皆さん方がいるわけでしょう。逆に子どもが誕生して、赤ちゃんが生まれて女性が「お母さん」と呼ばれるんでしょう。男性が「お父さん」と呼ばれるんでしょう。だから父、母という存在は赤ちゃんが生まれなければ、父も生まれえないし、母も生まれえない。無論、子どもは親によつて生まれるけれども、親もまた子どもによつて生まれてくる、そういう関係。これを「縁起」と言います。あるいは「机」がありますよね。今、我々はこれを「机」という名前で呼んでいますよね。ここの「机」見てください。何からできていますか？ 材料は材

木。ここに鉄杭が入ってますよね。あるいはここでいろいろと塗料が塗ってある。あるいはこれを作った大工さんや建具屋さんがいた。いろいろな諸々のものが寄り集まって、「机」というものが出来上がっているでしょう。「机」なんて初めからあるものではありません。色々材料や技術、機械・道具、人の手が寄り集まって「机」が出来上がっている。しかも今私たちはここにもものを置くことができる。講演会の時に使える、これを「机」という名前で呼んでいるにすぎないです。この「机」が永久不変にあるかといえ、ご覧のようにだいぶ長い間使っているから、所々傷んできたり、塗料が剥げてきているでしょう。しかも火にくべたらどうなりますか？ 灰に変わっちゃうでしょう。一瞬にして「机」はなくなってしまう。あるいは、例えば今ここに猫がピョンと乗ってきて、ここで猫が眠り始めたら、これは「机」じゃなくてベッドになるでしょう。あるいはまたもしも私がここでお尻を乗せて腰かけたならば、これは「机」じゃなくて椅子に変わってしまいますよね。変化するものでしょう。そういうのを「無常」というんです。いろいろなものに寄りかかって始めてものが出来上がってくるという考え方。それが「縁起」なんです。全てのものが他のものとの繋が

自校史と建学の精神

り、関わりの中で始めて生じ、そして存在しているから、だから無常なんです。変化するんです。「机」は始めからあるものじゃないんです。いろんなものが組み合わせられて出来る。しかもその「机」はいろんな状況によって壊れたりするし、変色もする。灰にもなるし、椅子にもなるという、無常な存在でしょう。また、「机」というものは何ら実体的なものではない。仮にこういう木や、その他諸々のものが寄り集まってできたもの、しかもこういう所で使うから、たまたまそれを「机」という名前を付けているだけです。そういう意味で「机」という実体はそもそも存在しないのです。ですから、そういうのを「無我」と言うんです。「無常」とか「無我」という言葉が仏教の代表的な言葉として使われるけれども、それは全てのものが「縁起」の関係で出来上がっているから、無常であり無我であるという、そういう論理ですね。だから、「縁起」という考え方が仏教の中で一番根本の考え方なのです。一番大事な考え方であるということをごさ、覚えておいて下さい。

縁起的存在というものをもう少し具体的にお話して行こうと思います。「私のいのち」というように私たちは普段呼んでいますね。皆さん方の「命」、その「いのち」

について考えてみましょう。それが実は縁起的存在だということをお話してみようと思います。まずは「私のいのち」と言いますけれども、本当に私のものと言えるんだろうか。そんなバカな、私のいのちに決まってるでしょうと思われるけれど、本当に私の所有物と言えるのだろうか。というのは、まず私、一郷正道といういのちは、父母がおったればこそ賜った命ですよ。私の父はその前におじいちゃん、おばあちゃんがおられた。母にもおじいちゃん、おばあちゃんがおられた。私は見たことも声を聞いたこともないけれど、曾祖父さん、曾祖母さんがおられなかったら今の私はありませんよね。といった具合に私の命のルーツを辿っていくとどこへ行くと思います？

皆さん方「ご先祖」と言うでしょう。ご先祖をもっともつと遡ってゆくと、どこまでゆくか。分からないでしょう。皆さん方のご先祖、どこまで行きますか。辿っていけば無限大ですよ。無限の昔に遡りますよね。そんなに深い長い歴史があつて、しかもその間、一人も欠けなかったからこそ、今の皆さん方がおられるでしょう。あるいは又、逆に未来のことを考えるならば、私には今子どもがいますね。子どものところには孫が生まれる。孫がまた子どもを生むでしょう。というように未来に亘ってずっと

自校史と建学の精神

繋がって行きますよね。無限大になる。時間的には過去・現在・未来というのは時間の断絶がないんです。不連続の連続です。時間の断絶のないところにしか私の命は生まれてこなかった。またこれからも存在し得ない、という関係にあります。そういう関係で「私のいのち」というと、寿命というのはこの世の中に生きていた時間だけ、例えば八十年間であった、あるいは十五年間であった、六十年であったと、この世の中で息をしていた時だけが「いのち」であるとしか考えようとしません。これが現代人のいけない点です。そうじゃなくて、過去・現在・未来と、脈々と繋がっている、その中のほんの八十年、六十年という、ほんの短いスパンでしか、この私の命というものはないと思いがちだけれども、そうではなくて、非常に長い歴史の中においてはじめて私の命はあるんだという、そういう認識が大事だと思います。まず時間的と言いますか、縦の軸で考えますとそういう形で私の命がありますよね。あるいは横の軸、兄弟がいますね。親類の人がいる。あるいは町内の人との付き合いがある。あるいは友達がいる。あるいはペットとの繋がりがある。この頃はペットの方を大事にされる家があるみたいだけれども、もっと広げていけば自然環境との繋がりが、関わり合い、

いわば私にとって他者ですね。この「他」なるものとの繋がり、関わり合いがあつて、今の私がここに存在しているんだということを認めざるを得ないのではないのでしょうか。そうすると、今私のいのちと云うけれど、時間的、空間的に、縦の軸、横の軸という角度から分析すればするほどに、私の力でもって、私一人の努力によって、今の自分があるんだとは思えなくなってきました。言い換えるなれば、私の命は、「賜り物」でしかないんだと、そういう受け取り方。どうですか皆さん、ご自分のいのちは賜り物でしかないんですよ。分りますか。

そう思つて親鸞聖人の文献を探しますと、『歎異抄』という書物があるのですが、親鸞聖人のお弟子さんの唯円という方が書かれた書物です。その中にこういう言葉がある。「一切の有情は、みなもつて世々生々の父母兄弟なり」。有情というのは普段使わない言葉ですが、有情という言葉は衆生という言葉でも使われますけれども、仏教で「有情、衆生」と言つた時には、生きとし生けるもの、という意味です。生きとし生けるものとは何かというと人間のいのちだけじゃないんです。動物のいのちも、植物のいのちも、皆、生きとし生けるもの、呼吸をするものという意味では同じ価値を

自校史と建学の精神

持つものなんだということが仏教の教えです。これ大事です。その、一切の有情は、みなもって世々生々、ですから、生まれ変わり死に変わりしていく歴史のいのちの経巡りの中にあつては、父母、兄弟であつたといふんです。平たく言うくと、私、一郷のご先祖と、さつき司会をしておられた真東さんのご先祖は、父であつたり母であつたり、兄弟であつたといふ、そういう関わり合いの中において、今、真東と言つたり、一郷と言われる人間がいるんだというそういう理解です。すごい考えですし、皆さん、そんな考え方、分かりますか？ とんでもない考えだと思われるでしょう。でもこれは生物学的にも証明されているんです。人のもとは何ですか。それは今から約三十八億年ほど前に海中にいた一つの細胞といわれています。人類、ヒトの祖先に近いものは、チンパンジーの祖先でしょう。遺伝子が少し違うだけで、ある者はチンパンジーになり、ある者はヒトになるのです。そういう意味においては、逆にチンパンジーからヒトが生まれたとさえ言われるくらいでしょう。そこに長い命の経巡りにおいて、真東家のご先祖と、私のご先祖が父であつたり母であつたりするのは何らおかしくないでしょう。そう思いませんか？ このような考え方は親鸞聖人だけのとつ

びようしもない考え方ではなくて、実は古い歴史があつて、インドの四世紀、五世紀に生きておられた、アサンガ（無着）という立派なお坊さんも同じことを言っておられます。

一切の有情は、無始（初めがない、大昔から）よりこのかた生死を遍歴し長時にわたり流転するとき、互いに、父、母、兄弟、姉妹、師、高貴で権勢の人に、ならないことはない。かかる因縁によつて、一切の敵はみなわが友人でないことはない。

と、四世紀の段階で喝破されています。これが現在の歴史の事実を見たら納得させられます。今、中近東でイスラム教とキリスト教が非常にむごい、いわゆる宗教戦争というものをおこなっているでしょう。しかしキリスト教とイスラム教は元はどうかという、ユダヤ教です。ユダヤ教という大本の宗教があつて、そこからキリスト教が生まれて、それからイスラム教が生まれたんです。今は敵同志のように争っているが、

自校史と建学の精神

イスラム教とキリスト教は元はユダヤ教という同じ宗教です。だからこのアサンガが喝破している、「一切の敵は」、今は敵ですが、「みなわが友人でないことはない」という言葉は、まさに正しいでしょう。そんなことが教えられます。次の資料、相田みつをさんの有名な詩を味わってみましょう。

『いのちのバトン』 相田みつを

過去無量のいのちのバトンを受けついで

いまここに

自分の番を生きている

それが

あなたのいのちです

それが

わたしのいのちです

そういう受け止め方が可能になるんです。私の命は賜り物なんだということになると
思います。

次にこの私の命は「私物化、私有化できないもの」。このことも私の命の本当の姿
であるといえましょう。その例を次の詩で味わいましょう。

『脈はく』 宇野正一

一分間に六十五 きちんきちんと

休まずとまらず うちつづけ 六十余年

あと何年何日か

眠っておつてもぐちつておつても

休まずとまらず

これは分かりやすいですね。皆さん、心臓に手を当てると鼓動してますよね。皆さん
方にとって「生きている」という証は何ですか。何が皆さんにとって生きている証で

自校史と建学の精神

すか。自分が生きているなあと感じるのは。心臓が鼓動していてくれること。あるいは脈拍の音を聞くこと。それによって自分はこの世に生きているんだと感じるでしょう。ところがどうですか。心臓の鼓動にしろ、脈拍にしろ、私の心臓の鼓動、私の脈拍ですね。しかも、生命の一番大事なものはたつきでしょう。その大事な私の心臓の鼓動なのに、皆さん、自分の心臓を鼓動させることができますか。自分の脈拍を動かすことができませんか。もうだいぶ長いこと働いてくれたから少し休ませてやりたいと思っても、休ませることもできないでしょう。それが皆さん方の、私たちの命を司っているわけでしょう。そうであればそれを私のものと言えますか。疑問を持たざるを得ないですね。

あなたが人生に絶望しても、人生はあなたに絶望しない

という言葉があるんです。これはフランクフルという人がナチの収容所に収容されていた時、一緒に収容されていた仲間が、今我々はこんな所に収容されている、やがてナ

子の連中に毒ガスかなんか撒かれて殺されてしまうであろう。あんな連中に殺されるくらいなら、前もって自分の方から先に自殺してしまおう、という提案をしたんです。その時、フランクは「あなたが人生に絶望しても、人生はあなたに絶望しない」というそういう解答をしたのです。彼らは戦争が終わって運良く収容所から解放されて出てきた。そしてフランクは『夜と霧』という有名な書物を書いたんですが、そこに書かれている言葉です。どうですか。私の心臓の鼓動、私の人生と言うけれども、私のものと言っているながら、私のものと言えない、そこに我々の命の本当の姿があるんだということが理解できるでしょう。

だから私の命は私物化、私有化できるものとは違うんだということです。

それでは私たちの命はどういうものなのかと言うと、別な言葉で言うならば、それは「支えられているもの」なんだと、あるいは生きているんじゃないかって「生かされているんだ」という、そういう理解。それを次の詩で味わいましょう。

『支えられてわたしが』

東井義雄

自校史と建学の精神

ざしきに上がればざしきが

ろうかに出ればろうかが

便所に行けば便所のゆかが

どこへ行ってもどこへ行っても

わたしを支えてくれているものがある

そればかりではない

妻も子どもも孫も

有縁無縁の人々も

生きとし生けるもののいのちたちも

石も土も火も空気も

わたしを支えておってください

ああそればかりじゃない

忘れづめのわたしを支えづめに

久遠の願いがわたしを

支えていてくださる

この詩からも分かると思いますが、私という存在は全てのものによって支えられている存在なんだという受け止め方です。どうですか、皆さん、自分は全てのものに支えられているんだ、全てのものによって生かされているんだと、そういうこと、考えたことありますか？ もしなかったならば今日、この時間を機にして、自分は支えられた存在なんだと。私はこれまでは自分が努力しているから、私が頑張っているからここに生きているんだと思っておられたでしょうけれど、実はそうじゃないんだと。私は全てのものに生かされている存在なんだと、そういう自分についての理解を改めて抱くと思います。

それにちなんで、高 史明先生の朝日新聞に載った次の文章を味わいましょう。

自校史と建学の精神

ある日、玄関先に現れた女子中学生は、見るからに落ち込んだ様子でした。

「死にたいって、君のどこが言っているんだい。ここかい？」と頭を指すと、こくりとうなづきます。私はとっさに言葉をついでいました。

でも、君が死ねば頭だけじゃなく、その手も足もぜんぶ死ぬ。まず手をひらいて相談しなきゃ。君はふだんは見えない足の裏で支えられて立っている。足の裏をよく洗って相談してみなさい。

数ヶ月後、彼女からの手紙には大きく足の裏の線が描かれ、「足の裏の声が聞こえてくるまで、歩くことにしました」と書かれてありました。

思えば真史が最後までこだわった「じぶんじしん」とは、足の裏で支えられた自分ではなかった。そのことに気づかせてあげていれば……。

あの息子は死ななくて済んだのに、という思いです。息子さんは十二歳で亡くなってしまわれたんですが、この息子さんもその時まで、その親である高先生も、自分自身というの自分の足で立っているというふうにしておられたんです。私自身は私の

足でもって立っているんだと、歩いていっているんだというふうに考えるのが普通でしょう。大半でしょう。それが大きな間違いだというんです。そうじゃなくて、私たちは足の裏、見えないものに支えられて今の私はいらんだというそういう受け止め方ですね。どうですか。納得できませんか。私の命は賜りものでしかないんだと、私物化、私有化できないものなんだと、私という存在は生かされている存在なんだ、支えられている存在なんだというふうに受け止める。全てのものによってこの私が生かされていると、それが私たちの本当の姿だというんですね。全てのものというのは何かというと、何を食べた、誰々がいる、先生のお陰だ、両親のお陰だ、という目に見えるものだけじゃなくて、目に見えないものを含めての一切合財、そういう全てのものによって私の命、存在はあらしめられているんだというそういう理解です。一切合財というのは、目に見えるものだけじゃなくて、目に見えないものも含めて、時間的、空間的に、それによって私がこうして生かしていただいている、生かされているんだという、そういう自分というものの理解の仕方、受け止め方、これが「縁起的存在」という事の内容なんです。お分かり頂けますか。

自校史と建学の精神

もしもこの自分が縁起的存在ということに気づくと、どういうことになってくるかという、私は生かされている存在だということが分かってくると、「執着の否定」。執着というのは一つのものにとらわれていることでしょう。いつまでも若くいたい、いつまでも美貌でありたい、病気になりたくない、いつも健康でありたい、死にたくない…、これ一つの執着ですね。自分の欲望に我々は執着するわけでしょう。今お話ししたように、全てのものが縁起の関係によって今の私があるんだということになれば、執着する意味がなくなるでしょう。執着しているのがおかしいんだと。全ては無常であり無我でしかないんだから。そんなことにとらわれるのがおかしいんだということが分かってきますね。

あるいはまた、このちっぽけな私の存在が、全てのものに生かされているんだという、私をとりまく全てのものが、私を生かすために存在してくれるんだと、そういう気持ちになるでしょう。そしたらそこに出てくる気持ちは何ですか。「ありがとうございます」という感謝の気持ちでしょう。自分が縁起的存在だと分かれれば、そこに自ずと感謝の気持ちが生まれざるを得ないと思います。だからこそそこで謙虚な人間

になれるんです。全てのものがこの私一人のために働いてくれているんだなあ。全てのものによって私はあらしめられているんだなあと思うから。それで「俺が、俺が」と思っている考えがそこでなくなってくるわけですね。謙虚にならざるを得ない。謙虚な姿はどういう姿かというと、頭の下がった姿なんです。我々、頭を下げることはできませんよ。自分の都合のためならばいくらでも頭を下げることができます。しかし本当に自然に心から頭が下がる、これはなかなか難しい。どうしたらこれができるかといえば、自分、私という存在が縁起的存在なんだということが分かれば、そこで感謝の気持ちをこめて、自然と頭が下がってくるということです。

もう一つ、自分が縁起的存在なんだということに気づけば、私の命が、あるいは私の人生が、自分の思う通りにならなくて当たり前なんだという、そういう理解にもなってきましたよね。これが大事だと思います。私たちは自分の思い通りにしようと思うから、それで苦しみが湧いてくるんです。むしろ努力はしますよ。与えられた環境において、最大のベストは尽くしますよ。でも考えてみれば、自分が努力すれば必ず自分の願いが叶うなんてことはないです。いくら努力しても叶いっこないことがある。

自校史と建学の精神

しかしそれは考えてみれば縁起的存在なんだから、思い通りにならないで当たり前なんです。そういう考え方、境地に達すると思います。それがまず縁起的存在の理解の内容なのです。

罪悪深重の身

もう一つ、本当の自分、真実の自分はこういうものか。それは、自分は罪悪深重の身、というそういう自分の姿に気づいて頂きたいと思います。これは自分の内心をえぐり出すようなことだから、なかなか自分の本性を見たくないし、見せたくない。皆さん方、一人として自分は悪人だとか罪人だとか思っているんじゃないでしょうか。「罪」とか「悪」という言葉は警察のご厄介になった時にはじめて、罪とか悪という言葉が降りかかってくるくらいしか思っていないんじゃないでしょうか。ただどそうじやないんです。それを今からお話しようと思うんです。まず、宗教的には罪とか悪というの、法律上の問題と違うんだということです。

五戒について

それでそこに「五戒」、五つの戒めを挙げておきました。仏教徒である限り守らなければいけない五つの約束事があるんです。第一が「不殺生」。生き物を殺してはいかん。どうですか皆さん、不殺生を守りなさいと言われて不殺生を守れますか。自分に問うてみてください。さっきも言いましたように、仏教で生き物と言った時には人間だけではない。動物の命も、植物の命も含めて生き物といえます。そうすると私たちは、朝、お肉を頂いた、魚も頂いた、みそ汁で野菜も食べた。もう私たちは他の生き物の命を奪わないことには自分の命を支えられないでしょう。私たちは毎日殺生の連続なんですよ。不殺生というルールを守れない私。自分の命を支えようと思ったから、他の生き物の命を奪わざるを得ない。これは罪以外の何ものでもないでしょう。生き物を殺さずにはおられないんだから。毎日私は殺生を犯しっぱなしなんです。だから、私たちはご飯を食べる時に「いただきます」と言うでしょう。あれ何で言う

自校史と建学の精神

の。何を頂くの。あなたの命を頂きますという表明でしょう。魚さん、お肉さん、野菜さん、あなたの命を頂きますよという、その感謝を込めた言葉です。それが「いただきます」なのです。殺生をしないことには私たちは生きていけないんだから、だからせて、ものを頂く時には「いただきます」と、感謝の言葉をはくということが理屈の上からも言えると思います。二番目は「不偷盜」。盗んじやいけない。盗み事をしてはいけない。これは守れそうですね。でも本当に我々は盗むことをしないでらうか。盗まなくて済むだろうか。これはたまたま今私が、皆さん方が、盗まなくてもいい状況に置かれているにすぎないんですよ。状況によっては私たちは何をするか分からない。これが人間の本性、恐い本性ですよ。盗んじやいけないと言われてもひよつとしたらそんな状況が来れば、私はそういうルールは知っていながらも物を盗んでしまうかもしれない。それが人間の姿なんです。その次は「不邪淫」。よこしまなセックスをしてはいけませんよ。夫婦の性関係は良いんです。その次「不妄語」。これは嘘を言っちゃいけませんよ。皆さん方、嘘を言わないで毎日毎日生きていきますか。私が一度も嘘を言ったことがありませんと言え人はどれくらいおられるかな。

嘘も方便という言葉がありますよね。それくらい我々は生きていくために嘘も言わざるを得ないんです。それが人間の本性。最後に「不飲酒」という言葉が出てくるけど、これはアルコールを飲んじやいかんというんです。これは難しいよね。日本で「五戒」というルールができたから、こんな「不飲酒」なんて言葉は入らなかつたと思いますが、インドで作られたから、だからこの「不飲酒」という、アルコールを飲んじやいけないという言葉が入っていると思うんですよ。インドは非常に暑い国でしよう。修行しているお坊さんが昼間からアルコールを飲んでたら修行になりません。だからアルコールを飲んじやいけないというルール、戒律が加わっていると思います。と、いう具合に、私は罪や悪を犯したことがあります、犯していませんと言いがちですが、よくよく考えてみれば仏教の教えに照らして合わせるならば、この「五戒」を守ることでできない私ですということ、内心白状せざるを得ないんじゃないかと思うんです。

自校史と建学の精神

倫理・道徳の限界

ちよつと角度を変えて次のエッセイを呼んでみます。遠藤周作という人のエッセイです。

【無意識の虚栄心】

取材が終わりかけて夕暮れの誰もいない廊下を歩いていた時、向こうから一人の老人がやってきた。老人が患者であることは一眼でわかったが、彼もまた私を見ると急に足をとめ、別の方向にかくれようとした。その時、私を伴っていた修道女が彼を呼びとめ、手招きをした。

「このお爺さんはね」

とおずおすと近よってきた老人の手をとって彼女は私に説明をした。

「ごらんなさい。病気で指がこんなに曲がっているのに、包帯巻きの作業なんか

手伝ってくれるのですよ」

そう言つて修道女は私の眼の前で、釘のように折れ曲がつた患者の五本の指をやさしくさすりはじめた。

私は思わず視線をそらせた。なぜならその時、老人が健康者の私に自分の歪んだ指を見られてゐる屈辱で、苦しい表情をしたからである。しかし修道女のほうはそんな老患者の心理にまったく無神経だったからである。

おそらく彼女は折れ曲がつた指をさすつてやりながら「わたくしたちここで働く修道女には、こんな病氣など何でもありませんのよ」と私に示したかったのであろう。意識的ではもちろんないが無意識の虚栄心がそこで働いたのであろう。それを感じただけに私は思わず眼をそらせたのだ。

断つておくが、私は彼女の行為を裁いてゐるのではない。生涯をあの病人たちに捧げたこの修道女の心に多少の自己満足や虚栄心が働く瞬間があつたとしても、彼女たちのような立派な生きかたのできぬ我々にそれを批判する権利はない。

自校史と建学の精神

しかしこの時の思い出はいつまでも私の心に残った。世のすべてを捨てて善きことを行っている修道女の内面にさえ無意識の虚栄心が働くことをまざまざと見たからである。後になってグラム・グリーンの「燃えつきた人間」というアフリカの救癩事業に働く意志を描いた小説を読み、そのなかに特効薬が発見された時に修道女たちが彼女たちの愛を行う場所がなくなると悲嘆にくれた挿話を知って、なるほどと思った。なるほどと思ったのは人間には完全なる善意を持つことや愛だけで生きることとはどんなに至難かが改めてわかったからである。

老患者の指をさすった修道女さん、私がああ時の光景をここに書いたことを許してほしい。(あなたがその思い出をすっかり忘れておられることを私は願う)しかしそれによって私は我々の心の奥底にある無意識がどんな遠隔操作を意識するかがよくわかったのだ。私流の言葉を使わせてもらうならば、我々が自分の外づらをどんなに装うと、それを嘲るように揶揄するように内づらがひよいと顔を出すことを。しかも我々はその内づらの出現に一向に気づいてもいないのだ。そして自分は正しいことをしている、善いことをしている、愛している、といつも

思いこんでいるのだ。その正しいことのために他人が傷つき、その愛のために相手が息苦しく思っていることがわからずに。…… 『心の夜想曲』

非常にデリケートな内容のエッセーです。この修道女さんは良い事をしていて、良いことをして、良いことをやる時に無意識にそこに虚栄心が働いてしまう、という人間性を追求している文章です。お互い我々時に良いことをしますよね。その時にどんな気持ちで良いことをしているのか。皆さん方の胸に問うてみてください。老人が電車に乗ってきた。混んでいるようだ。だから私が席を立つてあげる。それは当然の事、良いことですね。すべきことでしょうね。ところがひよつとしたらどうですか、みんなが見てるから、自分の善人ぶりを、立派さを見せようと思つて席を立つ人がいないとも限りませんね。どうですか。そういうデリケートな部分が問われるんです、宗教の世界というのは。そこには倫理、道徳では律しきれないそういう世界があるということ、私たちにおしえてくれているのです。無意識の虚栄心。これ非常に難しい問題です。

自校史と建学の精神

もう一つ最後にご紹介しますが、「善を懺悔する」という言葉。何故、善を懺悔しなきゃいけないの、と思うでしょう皆さん。何故、懺悔しなきゃいけないんですか。ここに実は仏教の教えのエッセンスがあるんです。難しい言葉を紹介します。「七佛通誠偈」。七佛は七人の仏さま。お釈迦さまを入れて過去の仏さんが七人おられたというんですね。その流れの中でお釈迦さまがお生まれになったということなんですが、その七人の仏さまに一貫して伝えられてきた戒め、教え、というのが「七佛通誠偈」というんです。

諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教

「諸悪」諸々の悪いこと、「莫作」しちやいけませんよ。つまり悪をしちやいけませんよ。「衆」は多く、たくさんという意味です。多くの善に努め励みなさい。悪いことをしないで良いことをしなさいということですね。これは当然のことです。ここまでは倫理、道德の世界です。そこまでだったら仏教にならないわけです。「意」は心、

其の心を清らかにしなさいよということです。これが諸仏の、いろんな仏さまの教えなんです。「自浄其意」その心を自ら清めなさい。その心とは何か。自分は悪いことをしないで良いことをしている。その良いことをしていると思っている、その心をも一度清らかにしなさい、しっかり追求しなさいよということを言うのです。我々は善をする、するんだけど、善をした時に、善をした私がもう一度その善をしたことについて反省をしなさい、と要求するのが仏教の教えだということです。そこに倫理、道徳の世界の限界があつて、やはり、仏教の教えは必要なんだなと、やっぱりあるべきだなということを感じてはいます。

このように、私という存在は縁起的存在である。罪悪深重の身である、というそういうことが分かつてくると、そこで何が分かるかというのと、全ての人が、隣にいる人も、あの人も、友達も、私と同じような存在だ、縁起的存在なんだと。罪悪深重の身の存在なんだと分かる時に、そこで初めて自分と他との差別がなくなるわけね。同じ生かされている存在ですよということによって、そこにバリアがなくなってしまう。あなたの命も、私の命も、大きな一つの命の繋がりと、いう点では同じです。たまたま

自校史と建学の精神

真東と言ったり、たまたま一郷と言う名前だけが付いているのであって、本質的なものにおいては内容的に同じ存在なんだということが分かってくる。そこで初めて、もしもあの人が悩み苦しんでいるならば、その悩み苦しみを自分の悩み苦しみとして受け止める。あの人が喜び楽しんでるならば、その喜びを我が事として分かち合うという気持ちになるわけですね。それが実は慈悲の心なんです。慈悲の心はけっして上からの目線で、何か困っている人に助けの手をさしのべる、物を施すということではないんです。その人と同じ目線で相手の気持ち、苦しみというものを理解し合う。言葉は使わなくてもいい。ただただ一緒にそこにいるだけで、相手の立場にたつ。そういう精神性。これが慈悲の心、思いやりの心というものだというふうを受け止めてくださればいいと思います。

お手元の資料に「説法躊躇」「梵天勸請」「初説法」難しい言葉が並んでおります。お釈迦さまは縁起の道理に目覚められて、自分の執着というものから解放された。要するに救われたわけです。悩みから解放された。お釈迦さま自身はそれで自分が長年に亘って抱えていた大きな苦難、大きな問題点から解放されたんです。お釈迦さまは

自分の目的を達したわけね。その後どうしたかというのが問題なんです。悟ったお釈迦さまはどうなさったか。周りを見れば自分と同じように悩み苦しんでいる人がいる。すぐ自分が悟った内容をその人に伝えれば、悩み苦しんでいる人が自分と同じように、苦しみから解放されるはず。ところがお釈迦さまはすぐそれをなさらなかったんです。「説法躊躇」と言って自分の悟ったことを人に伝えようとしなかった。説法をしようとしなかったんです。なぜか。これには巧みなトリックがそこに仕込まれているんだけど、それは当時の民衆の最高神、梵天が天から降りてきて、お釈迦さまに「お釈迦さま、あなたが悟った内容を我々に説いてください。全ての人が分からなくても、お釈迦さまの教えが分かる人がたくさんいるから、是非ともお話をしてください」と要請する。再三再四に亘って梵天がお釈迦さまに頼んだという逸話が、必ずお釈迦さまの伝記を読むと出てきます。考えてみてください。そんなのおかしいですよ。天にいるかどうか知らないけれども、神さまが地上に降りてきて、生きているお釈迦さまに頼んだということ自体おかしいでしょう。これは一つの象徴的なトリック、表現です。この逸話には何が込められているかというと、当時の宗教界の代表者

自校史と建学の精神

である梵天、ブランフマ神ですら、お釈迦さまのところにひれ伏して、仏教の教えを教えてください、それによって全ての人が救われて行くんですよと、そういうことを言っているんです。紀元前五、六世紀の話でありますけれども、その当時のインドの宗教の地位がひっくり返ってしまったわけです。お釈迦さまの仏教の時代がきたという、それを象徴するような事件として伝えられたわけです。ここには、説法を躊躇して、梵天の勧請に促されて説法をととうとなさったという、ここに、「慈悲」ということが仏教の歴史において、どこに発生するかということをお話しているのです。仏教の慈悲というのは、内容はさきほどお話したとおりでありますけれども、歴史的事実として慈悲がどこで発生したかと言うと、お釈迦さまが初めて説法をなさったという、そこに慈悲というものが発生したという理解です。このことも覚えておいてください。

慈悲という言葉を先程現代語に訳してお話しました。もし英語でそれを説明するならば、Compassion という英語があるんです。Com という接頭字は「共に」という意味です。Passion は「苦しみ、悩み」ですから、悩み、苦しみを共にするというのが慈

悲という意味です。相手の悩み苦しみを我が事として受け止めていくという、そういう精神性。それを慈悲というんだと。あるいはまた、お経ではどういうふうに説かれているかという、一つ代表的なものを出しておきますと、『維摩經』というお経をご覧くださいと、

衆生病むが故に菩薩も病み

衆生癒ゆるをもつて菩薩も癒ゆ

「衆生」というのは生きとし生けるもの。「菩薩」は仏教の修行者です。皆さんが苦しんでいると修行者、菩薩も苦しい。皆さんが病氣から解放されれば、修行者も苦しみから解放されるといふんです。もつと平たく言ってしまうと、赤ちゃんとお母さんの関係を思い出してください。皆さんが赤ちゃんの時に風邪にかかる。そうするとお母さんは必至になって心配されるよね。赤ちゃんが風邪をひいたということによってお母さんも病むでしょう。あなた方が風邪から解放されるとお母さんもホッとして解放

自校史と建学の精神

されるでしょう。そういう関係です。そこに慈悲の姿を見ることができません。

眞の自分、私とは何ぞやといった時に、それは縁起的存在である、罪悪深重の身である、という自分の本当の姿に気が付く。そうすると自分は生かされている身なんだなということに気づきます。そこから出てくるのはみんなが平等な状態だと、差別されない状態にお互いがあるんだということに気づく。そうするとそこには、私一人の命を生かすために全てのものが働いてくれているんだなということがあるから、そこに自ずと感謝の気持ちが出てくる。そこで謙虚さというものが出てくる。頭を下げざるを得ない。頭が下がってくる。その気持ちが自ずから他人に対しても広がっていく。それが「利他」ということです。それが慈悲の心だということです。というようにご理解くださいればいいと思います。

最初に申し上げました、「京都光華のエンロールメント」という教育システムは、実は建学の精神にのっとって、慈悲の心で一緒になって皆さん方一人一人に、親切に、親身になって対応しようという考え方です。その根底にあるのは仏教精神、慈悲の心に基づいた、眞實心という言葉に表わされている。慈悲の心にとった、それ

が、「京都光華のエンロールメント」ということなのだところご理解ください。

そんな慈悲の心をこの在学中に身につけたところで、今の世の中を生きていくにあたって、どうだという問題があるでしょう。どうですか皆さん。他人に対する配慮、他への思いやりということをも身につけること、私は非常に今の世の中に大事なことだと思います。よく世間では「自己中心主義」の時代だと言われるでしょう。自分さえ幸せになればそれでよしだと。そういう風潮が強いのが現代ですね。慈悲の心は全く違います。他人が幸せにならなければ私も幸せにならないという考えでしょう。他への配慮がなければ本当の自分は幸せじゃないという考え方でしょう。僕は非常にこれ大事だと思います。今の世の中、「自己中」という言葉に象徴されるような、そんな時代であればあるほど、こういう心ばせというものを学ぶ場として本学がある、ということとは貴重ではないかと考えます。そういう場を皆さん方は選んで、入学されたということ、非常に私は尊いことに思います。ですから是非とも、二年ないし四年間、在学中に今お話しましたような眞實心、慈悲の心を身につけて欲しいと思います。それが創設者の願いでもあるわけです。そうすることは私自身が世の中に出てい

自校史と建学の精神

くにあたつて、けつしてマイナスじゃない、むしろ大事な一人一人のありかただろうと思います。そういう心ばせを持った人間になること、これが大事なんです。要は、そういう心ばせを持った人間こそが今の現代には要求されているんだと私は思います。どうか皆さん、自信を持ってこの建学の精神にのつとつた教育というものをこの大学において学んで頂きたいと思っています。

——二〇一〇年四月三〇日——